

# 「名詞＋自動詞連用形」型複合名詞 の語構成について

王 鑫

キーワード：自動詞、複合名詞、語構成、修飾、格

## 要 旨

本稿は現代日本語の「名詞＋自動詞連用形」型複合名詞の語構成に注目する。まず、前後項の結合を修飾関係の成り立つものと成り立たないものに分け、その上、修飾関係の成り立つものについては、さらに下位分類を施した。その結果、自動詞連用形が後項を担う場合、結合されやすい名詞を多い順で並べると、「主語」「場所」「対象」「原因」などを表すものであることがわかった。次に、自動詞連用形が前項に位置する場合と後項に位置する場合におけるその結合関係と分布の相違は複合名詞の異なる名付け機能（モノへの名付けか・動作・状態への名付けか）に由来すると述べる。最後に、自動詞連用形が後項に位置した複合名詞は、他動詞のそれとは異なり、述語の用法を持つものの、モノとしての意味は場所と被動作主に限定されていることを主張する。

## 1. はじめに

「名詞」と「動詞連用形」<sup>1</sup>を構成要素とする複合名詞は日本語の複合語体系を構成する重要な一員である。その多様な語構成に注目し、さまざまな視点から研究がなされた。研究の蓄積だけを見ると、まず、動詞連用形が後項に出現する場合の研究が盛んである。そして、動詞の自他から見ると、研究の中心は他動詞となっている。本稿

---

<sup>1</sup>以下では複合名詞の構成要素としての「名詞」を「N」、「動詞連用形」を「V」と略す。したがって、「名詞＋自動詞連用形」型複合名詞は「N自V」型複合名詞と略される。

は今まで詳しく議論されてこなかった自動詞連用形が後項となる「N 自 V」型複合名詞を中心に考察を行う。また、その語構成を意味論的な視点から記述し、特徴を明らかにすることを目的とする。本稿の構成は次の通りである。2 節では先行研究を概観する。3 節では調査方法を示す。4 節では具体例を示し、5 節では全体の分布と複合名詞の意味を中心に考察を行う。最後の 6 節はまとめと課題である。

## 2. 先行研究

2 節では「N 自 V」型複合名詞を射程に入れた先行研究を概観する。

斎賀 (1957 : 233-234)、阪倉 (1966 : 431-432) は複合語の構成要素になりうるものを品詞別に整理している。その中の一種として「名詞+居体言」があり、名詞と自動詞連用形が複合した実例を紹介している。阪倉はさらに、「名詞」と「居体言」の意味関係は、「主語と動作」「目的語と動作」「主語・目的語以外と動作」に分けた。そのうちの「主語と動作」による複合は主に自動詞を対象としたものである。

奥津 (1975 : 48-45) は、意味伝達の観点から、複合語は単純語より複雑な意味を表す反面、文よりも経済性を持つことから、文レベルと単純語レベルとの中間に位置していると述べる。さらに、複合語の生成力は文に似ていて、その語構成は文に適用される規則と、若干の変則によって可能であると主張している。その上で、西尾 (1965 : 361) でいう「文の一部の凝縮」をさらに発展させ、複合名詞を「連体修飾構造の凝縮」として捉えることができると述べている。本稿の考察対象である「N 自 V」型複合名詞の詳細は、「NV 型複合名詞その他」の節で紹介されている。主な主張としては、「日暮れ」「水たまり」などは「日ガ暮レルトキ→日暮レドキ→日暮レ」のように、時制詞と第3項の削除によって生成されたと述べている (奥津 1975 : 38-37)。

影山 (1982 : 90-95) は、まず「NV」型複合名詞の意味に注目し、日英語ともに「動作、過程、状態」と「結果、産物」を表すことができるとしている。その上で、日本語の特徴的なところとして、「動作主、人間、職業」と「道具、場所、材料」なども表すことができると述べた。次に、名詞と動詞の結合関係を、「主語」「直接目的語」「副詞的表現」と動詞との結合に分けた。さらに、主語または副詞類と動詞の結合における日英語の相違に注目し、日本語は「言語化しようとする場面において特徴的な役割を果たす要素であればほとんど何でも編入することが可能である」と述べた。影

山 (1982) でいう「主語」と「動詞」の結合も「雨降り」のように、主として自動詞に対してのものである。

影山 (1993 : 49-50) では、非対格自動詞の主語が他動詞の内項と同じ振る舞いをしていることから、主語との結合が容認されない動詞は他動詞と非能格自動詞であると述べた。のちの伊藤・杉岡 (2002) は「NV」型複合名詞における名詞と動詞の関係を項関係による複合と付加詞による複合に分け、項関係の中では、他動詞の目的語と非対格自動詞の主語が含まれているとした。さらに、付加詞による複合は語彙的複合語であるため、語彙概念構造を用いた分析が有効であると述べた。動詞の意味をいくつかのイベントに分けた際、異なる下位事象が異なる付加詞を選んだ結果、複合語が形成され、さらに、その動作性にも関連付けしているわけである。しかし、自動詞は他動詞と全く同じ種類の付加詞を選んで複合語を構成しているとは考えにくい、詳細は明らかにしていない。具体例を挙げると、様態(一人歩き)、原因(水濡れ)、結果(黒焦げ)などを表す付加詞と自動詞連用形が複合した実例は簡単に見つけられるが、道具、材料を表す付加詞と自動詞連用形と結合した実例は意外と少ない。これは自動詞が持つ項の数との関係も考えられるが、その複合の内実をより詳しく検討する必要があるように思われる。

由本 (2015、2016) は基本、伊藤・杉岡 (2002) と同様の立場を取り、日本語における非対格自動詞と主語の複合は一般化できると述べた上で、副詞的修飾関係を持つ複合名詞は語彙概念構造を用いた分析が基本とし、特質構造、百科事典的な意味などを取り入れ、その多様な意味解釈のメカニズムの解明を目指した。さらに、「NV」型複合名詞は、「事象の名づけとして形成されているものと、行為を表す動名詞がまず形成され、それをもとに名詞化が適用されている場合との 2 種類がある」と述べた(由本 2016 : 83)。その後の由本 (2017、2020) は「NV」型複合名詞が属性叙述文としての用法に焦点を置き、複合名詞が「事象」から「属性」へ意味が変化する条件、そのタイプ分けと意味解釈メカニズムを明らかにした。あとで述べるように、「N 自 V」型複合名詞において、「都育ち」「田舎生まれ」など、場所と自動詞連用形が複合した用例の意味も「事象」から「属性」、さらにそのような属性を持つ「被動作主」へと拡張されたと推測できる。

以上、「N 自 V」型複合名詞に言及した先行研究を中心に概観した。研究の流れをまとめると、生成文法以前の記述的研究では、すでに日本語の複合語体系の構成員として、「N 自 V」型複合名詞への言及があった。しかし、そのほとんどは挙例にとど

まり、詳細は検討されていない。その後の初期の生成文法の研究では、語の形成は統語規則によって処理できると述べ、基本的なベースモデルが推奨された。のちの生成文法の研究は複合できる要素の制約を提案し、他動詞と同様の理論的な枠組みの中で自動詞を処理する機会が多い。このような異なるアプローチによる先行研究の共通点は、自動詞は常に他動詞に付随する形で議論されることである。しかし、すでに述べたように、自、他動詞がそれぞれ選択できる付加詞は異なる。それが、複合名詞が表す意味の相違にも関連しているように思われる。そのほかに、両者の違いの有無などを含めて議論するには、やはり複合名詞の結合関係を全面的に整理し、記述する必要があると考えられる。

### 3. 研究方法

本稿は『日本語基本動詞用法辞典』に収録された 230 個の自動詞を動詞調査リストとし、『三省堂新明解国語辞典 第七版』および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『筑波ウェブコーパス』から用例を収集した。収集した用例は 1964 例である。また、「N 自 V」型複合名詞の語構成を全面的に記述するため、造語成分や語素など、「N 自 V」型複合名詞の前部要素になりうるものをすべて調査対象とする。

### 4. 「N 自 V」型複合名詞の語構成

本稿が収集した「N 自 V」型複合名詞を前後の結合関係の相違によって、以下のように分類する。また、複合名詞の意味は複数の解釈が可能な場合が多く、以降の分類はあくまでもその代表的な意味解釈に基づいたものである。なお、修飾関係の有無による分類はごく一般的な分析手法で、本稿もこの分類法を援用する。

- (ア) ー修飾関係：主格が成り立つもの (4.1 節)
- (イ) +修飾関係：連体修飾 (4.2.1 節)  
連用修飾 (4.2.2 節)

#### 4.1 修飾関係が成り立たない「N 自 V」型複合名詞の語構成

修飾関係が成り立たない「N 自 V」型複合名詞の例は以下のようなものがある。

- (1) 気合い、色上がり、雨上がり、値上がり、手空き、幕開き、罰あたり、字余り、訳あり、荷傷み、粉浮き、気移り、手遅れ、雨落ち、色落ち、心劣り、仕事終わり、足掛かり、歯欠け、草枯れ、世変わり、値崩れ、日暮れ、手違い、墨付き、雪解け、山鳴り、人通り、男泣き、女踊り、おかま踊り

(1)の用例における前項と後項の間に、「ガ格」が想定される。ここでは、「N他V」型複合名詞との比較を通して、その特徴を確認する。他動詞連用形が後項を担う場合、目的語と結合した「N他V」型複合名詞は、人間が能動的に行う動作とその動作への名付け機能を持つ(犬飼い、酒飲み)。さらに、動作を行う動作主(客引き)、動作を実現させるための道具・場所(缶切り、物置)などの意味を表すこともできる。一方、(1)のように、自動詞連用形が後項を担う場合、主格が成り立つ「N自V」型複合名詞の意味が相対的にシンプルである。人間がコントロールできない自然現象(地滑り)や変化(値上がり)、生理現象(気合い)などがほとんどである。そのため、「NがV」のように意味の公式化が可能である。

また、一般的に他動詞や非能格自動詞の主語が複合名詞の構成要素として現れる場合、様態を表す付加詞に降格される場合がほとんどである(影山：1982、伊藤・杉岡2002など)。しかし、(1)の「男泣き」「女踊り」はこれに完全に当てはまるわけではない。まず、「男泣き」は「男が泣くこと。ふだんあまり泣くことのない男が、堪えかねて泣くこと」(『日本国語大辞典 第二版』より)を意味し、「男」が様態ではなく、動作主を表している。本来は不適格とされるが、影山(1982：94-95)でいう「言語化しようとする場面において特徴的な役割を果たす要素」にあたり、語彙化されたわけである。また、この点は「女泣き」が辞書では立項されていないことから裏付けられている。「女踊り」も同様で、「女の演ずる踊り。特に近世初期、京坂で男だけの盆踊りを男踊りといったことに対していう」の意味と「女に扮(ふん)して演ずる踊り」の二つの意味がある(『日本国語大辞典 第二版』より)。後者の意味はいわゆる「様態」を表しているが、前者の意味において、「女」が動作主にあたり、本来、動詞との複合がブロックされるはずだが、そのような名付けの必要性が生じた場合は、複合可能である。

## 4.2 修飾関係が成り立つ「N自V」型複合名詞の語構成

### 4.2.1 連体修飾関係が成り立つ「N自V」型複合名詞

- (2) 夜遊び、秋曇り、七夕踊り、都踊り、水回り、根回り、首回り、棒切れ、名物切れ、水溜まり、裏通り、中通り、油污れ、肌悩み、親代わり

(2) の語例は一括りでさまざまな意味関係を表す「ノ」で前項と後項を結び付けることも可能だが、そのほかに、時間、場所(起点、経路、範囲など)、または変化の対象といった意味関係による解釈も容認され、それに相当するような表現によって前後を結び付けることも可能である。例えば、「中通り」は「中を通る」ことから、場所への意味拡張が起こったといった解釈も可能である。また、「水回り」はもともと「水田に水がよく行き届いているかどうかを見てまわること」の意味で、「ガ格」が予想されるが、「建物内で、水を使用すること。また、その部分」のような意味を表すとき、場所へ意味が拡張したとも考えられる(いずれも『日本国語大辞典 第二版』による)。しかし、現代人の感覚からすると、「ノ」の挿入もごく自然なことである。

以上(2)で見てきた通り、「ノ」による結合は一種の簡略化した手段に過ぎない。また、「ノ」が挿入可能であることと「連体修飾」という用語からもわかるように、(2)における後項は、動詞よりも名詞とみなすほうが妥当である。しかし、日本語の品詞は連続性を持つため、アクセントなどが手掛かりとなって、名詞と動詞連用形が弁別可能な場合もあるが、多くの場合は、はっきり分けることは困難である。このような事情も含めて、本稿では(2)のようなグループの存在を積極的に取り入れたい。

#### 4.2.2 連用修飾関係が成り立つ「N自V」型複合名詞

2節で紹介した通り、従来の研究では「NV」型複合名詞における主格、対格以外の関係を包めて「連用修飾関係」または「副詞的な修飾関係」と呼んだ。しかし、同じく副詞的な修飾関係と言われるものは、後項が他動詞か自動詞かによって結合できる成分も異なることが予想される。4.2.2節では「N自V」型複合名詞における副詞的な修飾の内実を確認する。また、ここで挙げたものの多くは先行研究によって明らかになったものであるため、特徴的なものみに説明を加えることにする。

- (3) 場所  
湯上がり、宿下がり、的外れ、天下り、巢離れ、家出、門出、川遊び、庭伝い、島生まれ、都育ち、山歩き、木隠れ、心残り、塾通い、地生え、川

- 沿い、山暮らし、山越え、伊勢参り、川渡り、祭り騒ぎ、里帰り、横滑り、裏通り
- (4) 道具  
水遊び、雪遊び、雛遊び、爪先歩き、手触り、指触り、爪先立ち、背泳ぎ、筏下り、年金暮らし、ミルク育ち、言葉戦い、笠踊り
- (5) 原因  
風折れ、霜枯れ、雪曇り、湯冷め、湯疲れ、水濡れ、怪我負け、知恵負け、酒焼け、日焼け、涙焼け、油汚れ、挨拶回り、熱割れ、喧嘩別れ、湯瘦せ、風揺れ
- (6) 様態  
一人歩き、スプレー咲き、大輪咲き、筒咲き、鈴生り、箱座り、体育座り、うんこ座り、坊ちゃん育ち、お嬢様育ち、輪乗り、日本晴れ、水太り、輪踊り、棒立ち、桃割れ、裸踊り、一人暮らし、二人乗り、浪人暮らし、兎跳び
- (7) 時間  
夜歩き、夜遊び、秋落ち、朝帰り、夏枯れ、秋渴き、昼咲き、秋晴れ、夜泊まり、夜逃げ、昼寝、梅雨冷え、夕立、夜泣き、朝焼け、七夕踊り、花冷え
- (8) 対象  
山登り、岩登り、木登り、馬乗り、曲乗り、波乗り、場慣れ、女慣れ、雪慣れ、質流れ、母親代わり、宿代わり、気掛かり、親掛かり、場当たり、口当たり、親勝り、手乗り、船酔い
- (9) その他  
悪遊び、早上がり、大当たり、バカ当たり、早生まれ、若返り、ボロ勝ち、半乾き、遅咲き、から騒ぎ、無駄死に、横座り、丸潰し、素泊まり、半煮え、生煮え、激似、楽寝、青光り、総当たり、一番乗り、素通り

繰り返しになるが、以上の分類は複合名詞における多様な意味解釈のなか、代表的な解釈の一つであることに注意したい。その上で、代表的な分類を見ていくと、(3)の用例の前後項の間には、起点を表す「カラ格」と「ヲ格」、動作の場所を表す「デ格」、経路を表す「ヲ格」、方向を表す「へ格」、着点を表す「ニ格」などが複合名

詞の意味解釈に関与していることがわかる。これらのものをまとめて「場所」と呼ぶ。(4)は前項が後項の動作を実現するための道具である。他動詞の多くは自由に道具と結合し、複合名詞が形成されることと異なり、自動詞において、道具と結合できるのは人間の意志性を持つ非能格自動詞のみである。また、後で述べるように、道具と結合された複合名詞には後項が自動詞連用形か他動詞連用形かによって意味が異なる。例えば、「石焼き」「油揚げ」のような後項が他動詞連用形の場合、動作への名付けだけでなく、「石で焼いたもの」「油で揚げたもの」のように産物への意味拡張が生じる場合がある。一方、後項が自動詞連用形の場合、複合名詞全体がモノを表すことはできず、もっぱら動作・状態への名付けを表している。この点は「N 自 V」型複合名詞における意味の特徴の一つとして挙げることができる。(6)において、「N のように V」のような公式化された解釈が成り立つ用例が多い。例えば、「お嬢様育ち」「うんこ座り」など。一方、「一人暮らし」「二人乗り」のような基準を表す「デ格」の解釈が可能な例も多数ある。これらは共通して後項動詞の動作がどのように行われているかについての描写であり、「様態」にまとめることができる。(8)における「対象」は二つのタイプがある。一つは「宿代わり」「船酔い」のような典型的な「対象」として捉えられるものである。もう一つは「山登り」のような、「経路」を表す「ヲ格」と「対象」を表す「ニ格」の両方の解釈が可能なものである。(9)について、前項が形容詞の語幹や接頭辞である場合が多い。これらも副詞同様に働くため、ここでは一つにまとめている。

以上では、連用修飾関係が成り立つ「N 自 V」型複合名詞を見てきた。その特徴的なものについて、次の5節では、他のパターンとの比較を通して、詳細に検討する。

## 5. 「N 自 V」型複合名詞の分布と意味

### 5.1 「N 自 V」型複合名詞の分布

本稿は修飾関係が成立するか否かによって、「N 自 V」型複合名詞を二分し、その上で、修飾関係のある「N 自 V」型複合名詞をさらに細分し、各分類とその割合を図1に示す通りである。



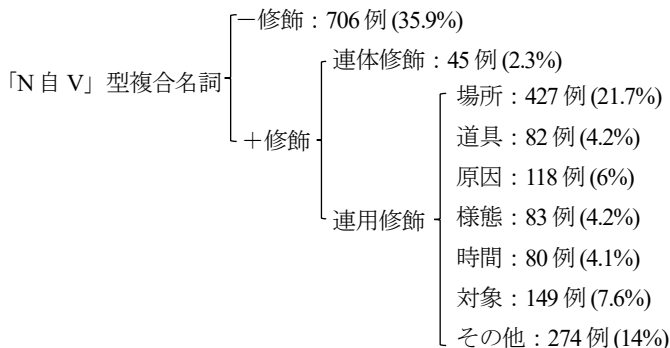


図1 「N自V」型複合名詞の分布図<sup>2</sup>

図1からもわかるように、「N自V」型複合名詞のうち、用例数の多い順に「主格」「場所」「その他」「対象」「原因」を表すものが並んでいる。「その他」の類は主に形容詞語幹や接辞のような成分が担う場合が多く、これらは一般的な名詞と意味の完全さや用法が異なるため、その議論は別の機会に譲りたい。

以上で挙げたような個別の項目については、先行研究には指摘がある。しかし、個々の結合関係を網羅的に記述し、さらに、その割合まで提示する先行研究は見られない。このような結合関係とその割合及び以降で述べるような「N自V」型複合名詞における意味拡張の貧弱さから、「N自V」型複合名詞の多くは自然現象や生理現象などへの名付けであるといった従来の研究の指摘に合致していることがわかる。また、「場所」との結合について、5.2節でも述べるように、「田舎育ち」「外国生まれ」のような過去に発生した事実を一つの「属性」として捉えられる。さらに、その「属性」を持つ被動作主まで意味が拡張されやすい。その意味拡張は「N自V」型複合名詞全体から見ても稀である。ほかの「原因」や「様態」との結合も、「N自V」型複合名詞における変化への名付けと関連し、その変化の内実を具現化されるものである。

このように、修飾関係が成り立たないものは単に名詞の表す事物にまつわるさまざまな状況のなか、動詞の表す変化や状態を取り上げ、「N自V」型複合名詞として名付けされている。一方、修飾関係が成り立つものにおいて、変化の主体あるいは非能格自動詞の場合の動作主が隠れているため、主体における動詞の変化が「いつ、どこで、何によって、どのように」起こったか(その状態になったのか)を表し、その変化

<sup>2</sup> ()内の割合は総用例数1964例に対するものである。

をより具体化するため、「N 自 V」型複合名詞が登場されている。いずれにせよ、人間が制御できない、あるいは人間の意志性を捨象し、現象のみを取り立て、「N 自 V」型複合名詞として名付けされていることに共通している。このように、「N 自 V」型複合名詞における名付け機能及びその機能を構築する各名詞成分の役割から見ると、図 1 のような分布はごく自然なものであるといえよう。

次の 5.2 節では、「N 自 V」型複合名詞をそれぞれ、「VN」型複合名詞、「N 他 V」型複合名詞と比較し、「N 自 V」型複合名詞の意味について検討する。

## 5.2 「N 自 V」型複合名詞の意味

「N 自 V」型複合名詞の特徴を明らかにするためには、「N 他 V」型複合名詞など他の構成パターンとの比較が有効である。

まず、名詞と動詞連用形で複合名詞を構成する際に、動詞連用形が前項にくる場合と後項にくる場合で複合名詞の機能が異なることに注目する。複合名詞は名付けの機能を持つ。動詞が前項にくる場合、修飾成分にすぎず、複合名詞の意味は後項名詞の表す事物の下位分類への名付けである。それと対照的に、動詞が後項にくる場合は動作・状態への名付けが中心である。「VN」型複合名詞は基本的に「NN」型複合名詞と同様に複雑な意味関係を持つ。そのため、主格、道具格以外に、複合名詞に公式化された意味解釈を与えることが困難である。ゆえに、百科事典的意味を取り入れ、人間の認知的側面を中心に、その共通した意味を抽出する試みもあった(野田 2011 など)。一方、「NV」型複合名詞の主要部は後項の動詞連用形であり、意味が比較的透明である。そのため、動詞に必要な項としての主語、目的語あるいは場所、原因、様態などいろいろな補語との複合がまず考えられる。自動詞が後項を担う場合、いろいろな制約が提唱されたが、とりわけ、主語の出現は非対格自動詞に限るとされた(主語が他動詞や非能格自動詞と結合される場合は付加詞に降格される)。これが非常に強力な制約ではあるものの、名付けの必要性が生じた場合、「男泣き」「女踊り」(女が動作主として解釈される場合)のような「反例」の産出も可能である。

次に、機能に連動している複合名詞の意味の違いに注目する。由本 (2015) では、「NV」型複合名詞は述語の用法と、モノなど具体物を表す用法があるとしている。しかし、これにおいても、自動詞と他動詞のどちらが後項を担うかによって、振る舞いが異なる。一つの大きな特徴として、自動詞が後項を担う場合、モノを表す意味が貧弱であることが挙げられる。「N 自 V」型複合名詞は「表通り」や「外国育ち」のよ

うなごく一部の「場所」や「被動作主」を表す語例以外はほとんどモノを表すことができない。一方、他動詞が後項を担う場合、述語名詞としての用法はもとより、「ねじ回し」「客引き」「手洗い」「小間使い」のように、「道具」「動作主」「場所」「被動作主」などさまざまなモノを表すことができる。これもまた、一つの出来事において自動詞と他動詞がそれぞれ担う役割の違いや参与度の違いに由来すると考えられる。

最後に指摘したいのは、複合名詞における意味の拡張や特殊化である。すでに述べたように、名詞と他動詞連用形が構成する「N 他 V」型複合名詞のうち、「ヲ格」が成り立つものだけでも、「動作主」「道具」「場所」などを表すことができる。しかし、「N 自 V」型複合名詞のうち、意味拡張や特殊化が確認できるのは「場所」と自動詞連用形による複合のみである。例えば、「表通り」「川沿い」「山越」「野育ち」「都育ち」「下回り」「田舎生まれ」など。これらの複合名詞の意味は「場所」や「被動作主」に限定されている。特に、後者の「被動作主」の意味において、「田舎で生まれた」事実から、その人の持つ「属性」へ意味が変わり、さらにそのような属性を持つ人間を指すようになった。その意味変化のプロセスは由本（2017、2020）などの研究では詳細に検討された。また、「水溜まり」は「主格」として解釈される場合もあるが（奥津：1975）、「水の水溜まり」のように、「溜まり」そのものも元々「場所」としての意味を持っているため、どちらの解釈が優勢であるかは簡単に判断できない。以上のことから、影山（1982：90-91）で述べられている「動作主、人間、職業」「道具、場所、材料」などを表す「NV」型複合名詞は主に後項が他動詞連用形の場合に限定されているように思われる。自動詞の場合は、このような意味をすべてカバーすることができない。多様な意味を表せる「N 他 V」型複合名詞とは異なり、「N 自 V」型複合名詞は基本的に自然現象や生理現象など人間がコントロールできない事象への名付けを表し、意味が限定的である。「N 自 V」型複合名詞においては、事象からモノへの意味拡張が容易ではなく、モノ名詞として用いられにくいといった結論の一般化ができるように思われる。

## 6. まとめと課題

本稿はこれまで他動詞に付随する形で処理されがちだった「N 自 V」型複合名詞の意味に注目し、分類を行った。まず、「N 自 V」型複合名詞における前項と後項の間

の修飾関係の成立の可否に基づき、「N 自 V」型複合名詞を二分した。次に、修飾関係を持つものをさらに、連体修飾関係と連用修飾関係に分け、連用修飾を「場所、道具、原因、様態、時間、対象、その他」に分け、それぞれが占める割合を提示した。最後に、他の構成パターンとの比較から、「N 自 V」型複合名詞における意味拡張は稀であり、モノ名詞としての用法は用いられにくく、「場所」と「被動作主」に限定されていることがわかった。

前述したように、後項が動詞連用形である複合名詞の研究は非常に盛んである。近年、特に個別の現象への記述や生成語彙論と認知言語学の連携による研究が数多くなされている。本稿で指摘したような違いは理論的な枠組みの中で、どのように処理すべきか。他の構成パターンとの比較も視野に入れつつ、問い直す必要がある。これらを今後の課題にしたい。

## 付記

本稿は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJS2124 の支援を受けたものである。

## 参考文献

石井正彦 (2007) 『現代日本語の複合形成論』 ひつじ書房。

伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 研究社。

王鑫 (2022) 「複合名詞の語構成—「自動詞連用形+名詞」型複合名詞を例に—」 『筑波日本語研究』 26, pp.20-36, 筑波大学日本語学研究室。

奥津敬一郎 (1975) 「複合名詞の生成文法」 『国語学』 101, pp.48-37, 武蔵野書院。

影山太郎 (1982) 「日英語の語形成」 森岡健二、他 (編) 『講座日本語学 12 外国語との対照III』 pp.85-102, 明治書院。

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房。

影山太郎 (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版。

影山太郎 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』 大修館書店。

斎賀秀夫 (1957) 「語構成の特質」 岩淵悦太郎、他 (編) 『現代国語学II ことばの体系』 pp.217-248, 筑摩書房。

斎藤倫明 (2004) 『語彙論的語構成論』 ひつじ書房。

- 阪倉篤義(1966)『語構成の研究』角川書店.
- 西尾寅弥(1965)「十三、単語の成り立ち」時枝誠記、他(監修)森岡健二、他(編)『口語文法講座6 用語解説編』pp.345-375, 明治書院.
- 野田大志(2011)『現代日本語における複合語の意味形成—構文理論によるアプローチ—』名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻(博士論文).
- 由本陽子(2015)「「名詞＋動詞」複合語の統合範疇と意味カテゴリー」益岡隆志(編)『日本語研究とその可能性』pp.80-105, 開拓社.
- 由本陽子(2016)「日本語複合名詞の意味解釈メカニズム」『言語文化共同研究プロジェクト』2015, pp.79-88, 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 由本陽子(2017)「事象から属性へ—日本語の動詞由来複合名詞の述語名詞用法について—」西原哲雄、他(編)『現代言語理論の最前線』pp.263-279, 開拓社.
- 由本陽子(2020)「日本語の複合における事象から属性へのシフト—「X＋動詞連用形」型複合名詞を中心に—」于一楽、他(編)『統語構造と語彙の多角的研究：岸本秀樹教授還暦記念論文集』pp.335-350, 開拓社.
- 葉秉杰(2021)『現代日本語の[[X]動詞連用形]複合語の連続性及び非典型性に関する研究』致良出版社.

## 辞書類とコーパス

- 北原保雄(編)(2021)『明鏡国語辞典 第三版』大修館書店.
- 小泉保、他(編)(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会(編)(2000)『日本国語大辞典 第二版』小学館.
- 山田忠雄、他(編)(2011)『三省堂新明解国語辞典』(第七版, デジタル), バージョン 1.3.2, 三省堂.
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言 2.7.2), バージョン 2021.03, 国立国語研究所.
- 『筑波ウェブコーパス』NLTVer.1.40, 筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所
- 『NINJAL-LWP for TWC』(<http://corpus.tsukuba.ac.jp>).

オウ シン／人文社会科学研究群  
(2023年10月7日受理)